

第8章 山の家へ



引つ越してきてから、およそ一カ月が足早に過ぎていった。

井上さん夫妻は慣れないアパートで年の暮れをすごし、新しい年を迎えた。

「こんなに静かな正月は初めてだな。……年始の客もこないし」

と、井上さんは努めて明るく奥さんに言った。

「毎年、六百枚以上は出していた年賀状だって、一枚も書かなかったんだから」

倒産した直後、その旨の挨拶状を付き合ひのあつた人びとや企業へ送った。井上木工所がなくなったのだから、いわば賀状欠札の挨拶をしたようなものだ、と井上さんは思っている。こちらでも喪中か謹慎中のつもりで、しんと静かに暮らしたほうがいい。

「わたしも暮れは樂をさせてもらいました。おせちをつくらない年なんて、ほんとにひさしぶり。お正月から、こんなに暇でいいのかしら」

と奥さんは言ったが、じつは大晦日に、いつもどおり黒豆を煮ていた。

洋子から頼まれたの、と言ひ訳をしたが、そればかりではなかつたらう。黒豆を煮ない

と年の明ける気がしない、というのが毎年の口癖だった。事実、奥さんの黒豆には、かねてから定評があった。洋子などは、黒豆を食べに元旦早々やってくるほどだった。

「ほかの料理はいらないから、ぜひとつくつてくれよ」

と、井上さんが奥さんに頼んだのは雑煮だった。

こればかりは元旦から三カ日のあいだ欠かせない。故郷の諏訪に伝わっている雑煮だ。醤油味のつゆに、焼いた角餅。盛りだくさんな具は、にんじん、ごぼう、しいたけ、だいこん、白ねぎ、青ねぎ、みつば、ゆず、かまぼこ、ぶり、結び昆布。

井上さんが幼いころから食べた雑煮を、結婚後ずっと奥さんがつくっている。いつのまに調理法を習ったのか、しばらく井上さんには見当もつかなかった。教えてくれたのが、ほかならぬ父親であることを知ったのは、東京へ出てきた翌年の正月だった。

「最初につくった年、お義父さんが味見しにきてくださったのよ」

それを初めて聞いたとき、井上さんは内心こそばゆい思いをした。

——そんな気づかいを、あのおやじがしてくれてたとはな。

そのときの複雑な気持ち、長いあいだ忘れられないままにすごしてきた。

奥さんには内緒だったが、正月を迎えるたびに老いた父親の姿が目につかんだ。

——おやじも同じ味の雑煮をひとりずつくって食べてるのか。

屠蘇のあと、雑煮の汁をすすりながら、ひそかに胸を痛めたものだった。

父親が諏訪の工房を閉じたのは、井上さん夫妻が東京へ出てきた三年後だった。

弟子たちが独立していき、やがてだれもいなくなった。そのことを、最後まで残った弟子が伝えて寄こした。七十をすぎた師匠をひとりにするのは忍びないが、自分のやりたい仕事もあるので止むを得ない、と五十代の彼は手紙に記していた。

「お父上だけでは、工房を維持していくのは無理でしょう。できることなら、おそばへ帰ってあげてください。わたしからもお願いいたします。」

しかし、そのころの井上さんには諏訪へ戻る気など、まったくなかった。

自分のつくったカントリー・ファニチャーが西急百貨店の家具売り場にならべられ、お客のあいだに人気が高まっていた。新しいデザインの家具をつぎつぎに製作してくれ、と仕入れ主任から催促もされて、いわば大きな波に乗ったところだった。

——この仕事には、わたしの人生がかかっているんだ。ようやく世間が認めてくれようとしているのに、いまさら振りだしに戻るようなことができるものか。

創業した井上木工所には、諏訪からついてきた二人のほかに、職人が五人増えていた。営業や事務の担当者も入れると、十人もの従業員を抱える企業となっている。経営者の井上さんには、彼らの生活を支える責任もあった。

ちよっとお義父さんにお会いしてきます、と奥さんが中学生の洋子を連れて、あわただしく諏訪へ出かけた。夫の意向を聞くまでもないという、奥さんにしては強硬な姿勢だった。しかし、翌日、氣落ちしたようすで帰宅した。

「こつちで一緒に暮らしてくださいって、お願いしたんだけど」

と、奥さんは哀しげな表情で報告した。

「いやだつて、はつきり断られてしまったわ。……けんもほろろ、に」

どんなに言いつがつても、毅然とした態度をくずさなかった。それでいて洋子に対しては優しい笑顔を絶やすことがなかったという。別れるときには、無骨な両のてのひらで洋子の手をはさむようにして、いつでも遊びにこいよ、と繰り返し言ったそうだ。

そのあとまもなく、父親は住み慣れた諏訪を離れて、木曽郡の榑川村奈良井へ移った。かつては奈良井宿と呼ばれ、中山道の宿場の一つとして知られた土地である。

ここに古くからある家を買いてつて工房とした。榑川村で数代にわたつて漆塗りを家業にしている中西さんという知人が、売家を紹介してくれたのだった。

木曽地方では、むかしから伝統的な漆器が製造されている。なかでも榑川村平沢は座卓をはじめ、さまざまな漆工芸品の産地として名高い。

父親は、ここの職人に自分の製作した家具のほとんどの漆加工を依頼していた。中西さんもそのひとりで、井上さんにとつても旧知の仲だった。

内々に電話をして、父親のようすを聞いてみると、

「ときどき覗きに行つとるけれど、とても元気にやつてるようだ」と、親しみを込めて答えてくれた。

「おやさんのつくつた家具は、みんな、たいしたできばえだ」
そう聞いただけで、井上さんには父親の元氣なことがわかった。

家具づくりに取り組んでいるなら、まったく健康上の問題はないはずだ。

以前から少しでも体調がよくなるときは、けっして道具を手になかった。

「具合のわるいときは、かならず仕事に乱れがあらわれるもんだ」

と、つねづね父親は口癖のように言っていた。

元気だったはずの父親が倒れたのは、樫川村へ移ってから二年後の秋だった。

知らせてくれた中西さんによると、いつものように工房を訪ねたら、父親が頭痛とめまいに襲われて寝込んでいたので、診療所の医師に診せたうえで、ただちに塩尻市内の病院へ運び込んだ。医師は脳梗塞と診断している、ということだった。

井上さんがクルマで駆けつけると、父親は病室のベッドでテレビを観ていた。

「わざわざくることはねえに。……おまえだって忙しいすらに？」

と、あいかわらずの不機嫌そうな表情で言った。

思ったより元気そうだったが、その顔が前よりも小さくなったような気がした。

今回は軽い脳梗塞だったが、いつまた発症するかわからない、と医師は告げた。

「お年のわりには体力のあるほうですが、いくら頑丈でも脳梗塞は防げません。できれば、息子さんの家に引き取って、静養させたほうがいいんですがね」

年老いた父親を独りにしておいてはいけない、と暗に非難されたようだった。井上さんは、無理やりにも東京へ連れていかなければ、と決心した。

しかし、どのように説得してみても、父親は頑なに拒絶するばかりで、

「なにを言うだ。おれは大丈夫だに。ほつといてくれ」

と、うるさそうに言い放った。

「おれは、いまの工房で一生を終えるつもりだ。その前に果たさねばならねえことが、いくつもあるだ。おまえは、おれの生涯かけた仕事の邪魔あするつもりか？」

激しい口調でそう言われると、井上さんには返す言葉がなかった。

親子のあいだの想いはともかく、同じ木工の仕事をしている者としては、父の言いたいことが痛いほどわかっていた。こうと決めた仕事を中途半端のまま放棄するぐらいなら、これ以上、生きている意味がない。その覚悟は、たがいに共通していた。

仕方なく、井上さんは条件をつけて引き下がることにした。

少なくとも半年は仕事を休むこと、仕事を再開しても無理をしないこと、毎日一度は中西さんにようすを見にきてもらうこと、お酒をひかえること。

それから二週間後に、父親は退院した。

井上さんは、奥さんと洋子を連れて、ふたたびクルマで塩尻の病院へ行った。父親は孫の顔を見たたん、人が変わったように優しい笑顔を見せた。大きくなった洋子へ、恋人を見つめる少年のようなまなざしを向けた。

井上さんは妻子とともに、父親を榎川村へ送りとどけた。

榎川村は長野県の西部にあつて、北は塩尻市、南は伊那市に接している。まわりを二千メートル級の山にかこまれ、奈良井川の西側に沿つて家々が連なる。

晩秋の山々は、紅葉にいろどられていた。

井上さんはクルマを運転しながら、ときどきルームミラーで後部座席を覗いた。父親が洋子とならんで、なにか楽しそうに話している。いつになく浮き立った表情で、まるで家族そろってドライブでもしている感じだった。

「一緒に暮らしてくださいさえあればいいのにねえ」

と、助手席で奥さんがつぶやいた。

井上さんは聞こえなかったふりをした。それを言いだせば、また父親は表情を変えるだろう。父親を中心にした家族らしいふんいきが一瞬にして消えてしまう。

奈良井の家並みから南へ少し外れると、旧中山道の難所といわれた鳥井峠への登り口がある。その手前の林のなかに、トタン屋根の古い民家が見えた。それが、井上さんにとって初めて訪れる父親の工房だった。

林に踏み入ると、ちょうどブナやカエデが落葉していた。黄色や朱色の葉がたえまなく舞い落ちて地面をおおいつくし、靴が埋もれるほどだった。

粗末な板壁をめぐらせた小さな家は、六畳間と四畳半の二部屋と、十二畳ほどの板敷きに分けられていた。板敷きは木工の作業場らしく、板張りの床の中央につくりかけの座卓が横たわっていた。そこは炊事も兼ねていて、隅のほうに約五十センチ四方の囲炉裏が切っており、そばに小さな流し台もあった。旧式の蛇口から水がしたたっていた。

六畳間と四畳半に、父親のつくった家具が置いてあった。センノキの丸太から木取りし

た飾り書棚、サクラの一枚板をつかった文机、クルミ材で組んだ小ぶりの筆筒。いずれも

父親自身が愛用していたもので、井上さんも若いころから見慣れていた。それらの家具が、

ひとり住まいの殺風景な家のなかを、居心地のよい場所に变えているようだった。

父親が落ち着くのを見届けてから、井上さんは平沢の中西さんを訪ねた。

退院の報告と、お世話になった札を述べて、

「あの家にいたいと言つてきかないので、しばらくは本人の希望どおりにさせます」

と、頑固に言い張る父親のようすを伝えた。

「いずれ説得して東京へ連れていきますので、それまでよろしくお願いいたします」

「まあ、おやじさんの好きなようにやらせりゃいいだ」

中西さんは事情をのみ込んでくれて、人のいい笑顔でうなずいた。

「おやじさんとは長え付き合いだで、わしらとは身内みたいなもんだ。なあに、あとの

こたあ、おれらにまかせておけね」

井上さんは、その日のうちに洋子連れて東京へ発った。洋子には学校があつたし、自分も木工所の仕事がかかっていた。受注した製品の納期が迫っていたのだ。

「このまま独りにしてはおけないわ。わたし、できるだけ、お世話していきます」

そう奥さんが言つたので、あとをゆだねることにした。

帰りのクルマで、しきりに洋子が話しかけてきた。

「ねえ、お父さん、またきていい？……お祖父ちゃんの山の家、大好きだわ」

「ああ、いいとも。冬休みになったら、すぐくるといい」

「お祖父ちゃん、可哀そう。……さよならって言ったら、笑いながら涙こぼしてた」

「そうかい。洋子が可愛いからだよ」

確かな歩幅で近づいている父親の老いを、そのとき井上さんは痛いほど感じていた。

——やっぱり、おやじの言い分を通すべきじゃなかった。どんなに表情を変えてがんばろうとも、無理やり東京へ連れてくるべきだったんだ。

あとで井上さんは、なんどもそう思っては、自分の決断を悔いることになった。

正月も五日をすぎると、朝の冷え込みが一段と増した。

その朝、目を覚ました井上さんは、ふだんとなにか感じがちがっているのに気づいた。しばらく夜具のなかで神経を集中させていたら、ほどなくその理由がわかった。

戸外からの音がしない。いつもは目覚めと同時に聞こえているはずの、小鳥の声や雑木林を揺らす風の音がまったくない。不自然なほど、しんと静まり返っている。

井上さんは肩をすばめて起き上がった。音をさせないように気づきながら、ガラス戸を開け、雨戸に手をかけた。そのとたん、思いがけなく胸がときめいた。

雨戸を開けると冷気が流れ込んできた。予期したとおり、外は真つ白だった。

「おい、起きてみなさい。……雪だよ」

隣の寢床へ声をかけると、奥さんがもぞもぞ身じろぎして答えた。

「昨夜から降りだしたんですよ。……明け方、トイレへ行ったら、もう積もってたわ」

「なんだ、知ってたのか」

がっかりした気分でガラス戸を開めた。曇ったガラスをてのひらで拭って、しばらく雪の降りしきる雑木林を眺めた。

雪のなかに立ちつくしている木々の幹は、ふだんより黒ずんで見えた。幹の片側にだけ雪を貼りつけて、それぞれ枝を重そうにたれている。雪を背負った竹の群れは、背をまるめたまま、ゆつたりと揺れていた。

見ているうちに雪の勢いが増してきた。しばらくは濃霧のように視界をさえぎったり、切れ間を見せたりしていたが、やがてすべてを閉ざしてしまった。

もういちどガラスの曇りを拭いてから、井上さんは寢床へ戻った。身体が冷えたので、まだ温もりの残っている布団のなかで縮こまっていることにした。

——あのときも、こんな雪降りだったな。

温かくなってくると、頭のなかもゆるみはじめたようだ。

井上さんは二十数年前の朝を思い浮かべていた。

——たしか布団のなかで電話のベルを聞いたんだ。

初めて榎川村を訪れた翌年の二月末、父親が退院してから三カ月後だった。七時ごろ、とつぜん電話がかかってきて、とつくに起きていた奥さんが受話器をとった。

「あなた。……お義父さんが」

と、井上さんの寝ている部屋へ飛び込んだ。

急いで電話に出ると、榎川村の中西さんからだった。

「なんとも、もうしわけねえね。おれがそばにいながら、こんなことになっちゃって」

「どうしたんですか、なにがあつたんです？」

「おれがきたときにや、もう冷たくなつてさあ」

前夜からの大雪で困っているかもしれないと、いつもより早めに工房へ行ったところ、作業場で父親が倒れていた。つくりかけの座車にもたれるようにして、すでに亡くなつていたと言ふのだった。

「囲炉裏に火を焚いた跡があつたで、どうも夜なべ仕事をしてたみてえで」

それだけ言うと、中西さんは絞りだすような声で泣いた。

井上さんは絶句して、しばらく受話器を耳に押しつけていたが、気を取り直して、

「とにかく、すぐ行きます。……それまで、待つててください」

と、やみくもに叫ぶような口調で告げた。

大急ぎで着替えて玄関を出ると、外は雪が降っていた。クルマを表の道路へ出すのがやっとという積雪のなかで、井上さんは途方にくれた。

そこまでは、はつきりおぼえている。しかし、それからの記憶は途切れがちな。

雪のため高速道路は渋滞しているだろうし、クルマで塩尻峠を越えられるかどうかかわからないという不安もあって、けっきょく新宿駅から列車に乗ったのだった。

ようやく工房にたどり着くと、中西さんが通夜の手配をしてくれていた。

「わるいけど、あんたのくるのが遅かったで、村役場のほうへ届けておいただ」

と、中西さんが朝からの状況を説明した。

「診療所の先生は脳梗塞が再発したんだろうと言つてたが、最期を看とつたわけじゃねえで。けっきょく変死のあつかいで、木曾福島から警察の係員がきて検死つてことになつただに。……三時すぎになつて、やつと白装束を着せてやつたところだに」

父親は四畳半に敷かれた布団に寝かされていた。白布の下から、白い顔があらわれた。思いがけず穏やかな表情をしていた。あらためて間近に見ると、頭髮や無精髭や眉も、固く閉ざされた瞼のあいだからはみだしている睫毛も真つ白だった。

「待たせてしまつて、ごめんね」

と、井上さんは語りかけた。

「もう安心していいよ。……わたしがついてるから」

その言葉を、どのようにに亡き父親が受けとつたかわからない。あるいは、生きているうちに聞きたかつたよ、と思つたかもしれない。遺体を前にして、複雑な思いに胸を締めつけられながら、井上さんは自分に言い聞かせることにした。

——一緒に暮らしてくれて頼んだのに、おやじが頑固に断つたんじゃないか。

しかし、それで気持ちの安らぐことなど少しもなかった。

父親が亡くなつたとき、井上さんはまだ四十代の半ばだった。井上木工所が業界に認め

られて、たてつづけにヒット製品を生みだしていた。

——おやじもおれも、それぞれに自分のしたいようにやってきただけのことだ。おたがい邪魔をしないってことは、おたがいを尊重してたつてことだろう。

そんな結論を出して自分を納得させたのは、ひとえに若かったからにすぎない。

あれから二十年以上もすぎたのに、孤独な死を迎えた父親の白い顔が、いまでもまざまざと目によみがえる。年齢が加わるにつれて、せつなさがふくらんでくるようだ。

井上さんは布団のなかで全身をこわばらせていた。

あれほど冷えていた身体が、いつのまにか汗ばんでいる。このあいだ横浜で出合った座卓が、その細部まで、くつきりと目に浮かんでいた。

——あれを見たとき、おやじのすごさを初めて知らされたような気がした。

何十年たとうと、びくともしない家具というものを、あらためて見せつけられた。それに比べたら、自分のつくったカントリー・ファニチャーなど、けつきよくは、やはりものにすぎなかったのではないか。井上木工所は当初から、出荷する製品にプレートを貼りつけて「信用の印」と誇りにしてきたが、あの座卓にはなにもなかった。

——おやじの家具にや、そんなものを付ける必要がなかったんだ。

井上さんは、横浜で感じさせられたことを、あらためて噛みしめている。

——もともと、おやじにや敵わなかったのか。

六十半ばをすぎて、ようやく気づかされた無念の思いだった。

井上さんは、いきなり掛け布団をはねのけて起き上がった。

——いまさら悔しがっても、どうにもならないだろ。

これから追いかけても間に合わない。それなら、いつそのこと、きれいさっぱり忘れてしまったほうがいい。そして、さっさと新しい一日をはじめることだ。

「……もう起きるんですか？」

と、隣の寢床から奥さんが言った。

「まだ七時前でしょ」

「いいんだ、もう少し寝てなさい」

井上さんはキツチンへ向かいながら答えた。

ヒーターに点火してから、そそくさと着替えながら、外へ出てみようと思った。

——チビが生きていたら、きつと、そわそわしてるだろうな。

年老いて家のなかで暮らすようになって、雪の朝は、けはいを感じるのか、しきりに外へ出たがった。玄関のドアを開けてやると、幼い子どものようなはしやぎぶりで、雪のなかへ飛びだしていった。

——あいつみたいに走りまわったら、さぞ気分が爽快になることだろう。

まさか、そうはできないだろうが、せめて空をあおいでみたい。降りかかる雪を顔に受ければ、活気にあふれていた子どものころへ戻った気分になれるかもしれない。

コートをはおって、マフラーをくびに巻きつけていると、思いがけなく真也の声が聞こ

えてきた。気のせいか、と耳をすましてみた。

「リーリ、……おはよう」

ひそめた声が、たしかに聞こえる。ペランダのほうで呼んでいる。

——こんな雪の朝に、どうしたんだろう？

井上さんは大急ぎでペランダのガラス戸と雨戸を開けた。雪の降りしきるなかで、真也が笑っていた。黒いフードとダウンジャケットが白くなっていた。

「ずいぶん早いじゃないか、なにかあったのかね？」

「だって、リーリ、もう八時すぎるよ」

真也は両手で雪をまるめながら、あきれたように言った。

あらためて腕時計を見ると、たしかに八時十五分をまわっていた。さつき奥さんが、まだ七時前でしょ、と言ったので、そう思い込んでしまったらしい。

「今日はサッカーの練習ができないから、自主トレなんだよ」

「ほう、雪のなかをランニングしてきたのか」

「ねえ、リーリ、雪合戦しようよ」

「よしよし、待っててくれ。……その前に、エーバを起こしてやらんとな」

井上さんは気持ちの浮き立つのをおぼえた。孫に誘われさえすれば、子どものころへ戻るのは、意外とかんたんなようだ。

いったんガラス戸を開めかけてから、ふと手を止めた。なにかが胸のなかで、はじけた

ような気がした。えたいの知れない熱いかたまりが、勢いよくふくらんできた。

——そうだ、行つてこよう。

井上さんは唇を引き締め、深くうなずいてから、真也へ呼びかけた。

「なあ、どうだ。……リリーと一緒にに行つてみないか？」

「えっ、どこに？」

「横川村。……ひいお祖父さんの住んでいた山の家だよ」

びつくりした顔で見上げてくる孫へ、井上さんはもういちど深くうなずいた。

——やっぱり、行かなくちゃ。

とつぜんの決心に、ためらいは感じなかった。

その日の午前中に、井上さんは真也を連れて新宿駅から特急列車に乗り込んだ。

あわただしい旅立ちなので、着替えの下着の入ったバッグを一つ持っただけだ。真也もナップザックを背負っているが、これには着替えと食料が入っているらしい。家を出るとき、洋子がありあわせの果物やクッキーなどを詰め込んだのだそうだ。

決心したあと、すぐに電話して洋子に了解を求めたら、

「スキーシーズンだから、だいたい電車は混むでしょうけど」

と、思ったより落ち着いた口調で言った。

「真也には、いい経験になるわね。……わたしも行きたいわ」

洋子は中学生のとき、またお祖父ちゃんの家へ行きたい、となんども言っていた。

とつぜんの祖父の死で、けつきよく望みは果たされなかった。そればかりか、あまりに急なことだったので、洋子は葬儀に出席することもできなかった。それもあって、落ち葉につつまれた山の家のたたずまいは、あとあとまで忘れられないものとなったようだ。

「お母さんのことは、まかせといて。……そんなに長くはならないでしょう？」

「ああ、一晩ぐらいいは泊まってくることになるだろうがね」

「あそこは奈良井宿で有名になってるから、けっこう旅館もあるはずよ」

「そうだな、ついでに真也さんと観光してくるか」

「お父さん、やつと行く気になったのね。……あの山の家は、あのまんまになってるんですよ。わたし、ずっと気になってたのよ」

「そうか。……気にしててくれたのか」

井上さんは、ひそかに恥じ入った。仕事の忙しさにかまけて、放置しているうちに、ほんとうに忘れてしまった。それなのに娘は、ちゃんと考えていてくれた。

午前十一時発の松本行特急列車は、予想どおりスキー客でいっぱいだった。

自由席は満席だったので、二人は通路に立っていくことになった。乗換駅の塩尻まで約二時間半の辛抱だ。とつぜんの思いつきだから、不自由は覚悟しなければならぬ。

さいわい若い女性グループが、座席の端っこに真也を腰かけさせてくれた。

真也のそばに立って、井上さんは窓の外の雪景色へ目をやった。東京を離れるにつれて、

少しずつ雪がまばらになつていく。どうやら内陸部には降雪が少ないようだ。

—— 榎川村はどうだろうか、おやじの死んだときは雪に埋もれてたが。

葬儀の直後、あとからきた奥さんと二人で遺骨を抱いて諏訪市へ向かった。井上家の墓に埋葬するためだった。知らせさえすれば、旧知の人たちが集まっただろうが、それは避けた。父親を独りにしておいたことへの後ろめたさがあつた。

納骨を済ませたあと、二人はまっすぐ東京へ帰った。榎川村に戻らなかつたのは、やはり西急百貨店から受注した仕事に追われていたためだった。

一周忌の法要は山の家でとりおこなつたが、中西さんほか数人を招いただけだった。ついでに家の整理をしようと決めていた。できることなら、土地と家を売却したいと中西さんに頼んでおいたのだが、とうとう買い手を見つけることができなかった。

「みんな便利なとこに住みたがつとるで、おやじさんみてえな変わった人はいねえだ」と、中西さんは苦笑いをした。

「なあに、このまんまにしといたらいいだ。ときどき風を入れといてやるに」

それをいいことに、父親のつくつた家具もふくめて、中西さんに管理を依頼することになった。年に一度は、相応のお礼をするつもりだった。

三回忌には、奥さんだけが榎川村へおもむいた。山の家は手入れが行きとどいていて、とてもきれいだったと奥さんが話していた。

七回忌の法要は諏訪市でとりおこなつた。このときは、中西さんほか榎川村の知人たち

と、かつての弟子たちにも声をかけて集まってもらった。井上さんの胸のなかでは、後ろめたさが、だいぶ薄らいでいたようだ。

十三回忌は墓参りだけで済ませた。植川村から中西さんが出てきて、しきりに父親の想い出を語ってくれた。井上さんには耳の痛い話もあったが、前年に結婚したばかりの洋子とその夫が興味津々の面持ちで聞いていた。

「ねえ、リーリ」

真也がコートの袖を引っ張っている。

「ミカン、食べない？」

「わたしはいいから、真也くん、食べなさい」

腕時計を見ると、およそ一時間がたっている。乗客たちの多くが弁当を食べはじめていた。真也の席のグループも談笑しながら、サンドイッチをつまんでいる。しまった、と井上さんは思った。新宿駅で弁当を買うことまでは、気がまわらなかった。

「おなか、すいたかい？」

「ううん、まだ平気。……ビスケットを一袋も食べたもん」

「あと三十分ぐらいで塩尻に着くから、乗り換える前に駅弁を買おうな」

真也が嬉しそうにうなずいた。その顔へ微笑みかけて、ふと井上さんは考えた。

——まさか孫と一緒にいくことになるうとはな。

長いあいだ訪ねることのなかった山の家へ、奥さんや洋子ならともかく、こうして真也

と連れだつて行こうとは夢にも思わなかつた。

——いや、真也くんのおかげで決心したのかもしれない。

今朝、急にその気になったのは、雪のなかの真也を見たからだつた。たじろいだり迷つたりしていた気持ち、あのとき、とつぜん吹っ切れたような気がする。

塩尻駅での乗り換え時間は、わずか五分しかなかった。二人は大急ぎでホームを移動するあいだに、なんとか弁当を買うことができた。木曽福島行きの普通列車は、二人が乗り込むとすぐに発車した。空いていた座席で、さっそく弁当を食べはじめた。

「やれやれ、お昼ご飯にありつけたな」

「間に合つたね、リーリ。ぎりぎりセーフだつたね」

まるで冒険でもしてきたように、二人は満足そうな笑い声をあげた。

三十分後には五駅先の奈良井に到着する。そこが奈良井宿の入り口だ。ホームでは気づかなかつたが、窓の外は寒風が吹きすさんでいた。

家を出る前に電話しておいたので、奈良井駅に中西さんが出迎えてくれた。

ひさしぶりの挨拶を交わしてから、まじまじと真也の顔を見つめて言った。

「やっぱり血は争えねえだな。……おやじさんよう似とるわ」

「そうですかね。わたしに似てると思ってましたが」

「あたりまえだ、あんたはおやじさんとそっくりだに」

事情を知りつくした中西さんは、のっけから気分を明るくしてくれようとしている。

せつかくの厚意にしたがつて、井上さんは素直になろうと思った。

「あんたが来なさるっていうんで、あわてて掃除しただよ」

と、中西さんが軽四輪を運転しながら言った。

「ここ半年ばか、おれも体調がよくなくて、ほとんど寄つてみられなかったもんで」

「すみませんね。……勝手なときに来てしましまして」

井上さんは助手席で肩をすばめて詫びを言った。後部座席で真也が奈良井の通りを眺めている。古い宿場の面影を残した軒並みが、クルマの両側につづいていた。雪は少ないが、舗装された路面が凍っているようだった。

軽四輪はゆっくり走りつづけ、やがて神社の先から山道をたどっていった。

山の家は、前に来たときとほとんど変わりなく、林のなかにたたずんでいた。

「玄関の鍵は開いとるだ。帰るとき、電話してくれば、すぐ迎えにくるで」

中西さんがフロントガラスの先へ視線を向けたまま告げた。家のなかまで付き合うつもりはないようだった。あるいは、邪魔をすまいと気づかっけてくれるのかもしれない。

二人はクルマを降りて近づいていった。足を踏みだすたびに、靴の下で薄氷の割れるような音がした。降り積んだ落ち葉が、幾層にも重なり合つて凍っているのだった。

真也は気味わるそうな表情で、爪先立ちして歩いている。

ときおり、すさまじい勢いで寒風が吹きつけてきた。そのたびに木々が大きく揺れて、

いつせいに野獸の遠吠えのような音を鳴らした。

玄関にたどり着いて、井上さんは引き戸に手をかけた。厚いガラスがはまった戸は、重たくしみながら開いた。風に背中を押されるようにして、家のなかに入った。

無人の家にしては、意外にも空気が暖かった。囲炉裏へ目をやると、かげろうのような温気が立ちのぼっていた。中西さんが炭火をおこしておいてくれたのだ。

「さあ、お入りよ」

まだ玄関の外で立ちつくしている真也へ手招きすると、おずおずと足を進めてきた。おびえた目つきで、そつと家のなかを覗き込んでいる。

その肩を抱くようにして引き入れると、井上さんは引き戸を閉ざした。追いかけてきた寒風を閉めだしたとたん、しんとしたなかに家を揺する音がひびいた。

このような古い家が倒壊することもなく保たれているのは、これまでなんとか中西さんを通じて、地元の大工に補修工事をしてもらっていたからだ。井上木工所が倒産する前は、その出費を気にもとめない余裕があった。

「すこかったね、リーリ。……こんなに強い風って初めてだよ、生きてるみたい」

真也は無理に笑おうとした。しかし、まだ顔はこわばっている。

「こんなところに、ひいお祖父ちゃんは独りで暮らしてたんだね」

「そうだなあ、よく平気だったな」

「ねえ、リーリ、ここに泊まるの？」

真也は心配そうだった。こんなところで寝るのはいやだよ、と表情が訴えていた。

井上さんは、わざと考えるふりをしながら靴を脱いだ。板敷きの床が靴下をとおして、厳しい冷たさを伝えてきた。炭火で温まっているのは空気だけのようだ。

「ここには布団がないからね、泊まるわけにやいかないな」

以前あった夜具は、葬儀の直前まで父親を寝かせたあと、衣類と一緒に、中西さんに頼んで処分してもらった。おそらく村内の焼却場へでも運んでいったのだろう。たとえ残しておいたとしても、湿気やカビどころか、野ネズミや虫の巣になっていたかもしれない。

「よかった。……はく、ここで寝ることになったら、どうしようと思っちゃった」

ようやく真也も靴を脱いで、おそろおそろ上がつてきた。

井上さんは懐かしむように板敷きを見わたした。

隅の板壁に、つくりかけの座卓が立てかけてある。葬儀の日にも、そこにあった。

その座卓に寄りかかるようにして、父親は死んでいたという。夜なべ仕事をしていたらいい、と中西さんが話していた。いまま未完成のまま埃をかぶっている。

「これはケヤキの一枚板だな。……前には、じっくり見る暇がなかったが」

てのひらで埃を払いながら、井上さんはつぶやいた。

「ちゃんとした細工がしてある。最期まで、いい仕事をしてたんだな」

「横浜の家で見たのと似てるね。あれより、ずっと小さいけど」

かたわらで、真也が座卓を見つめながら言った。

——ほう、よくわかつてるな。

井上さんは微笑んだ。たしかに天板の四周を細い板でかこんであるのは、あの座卓と同じづくりだ。しかし、板の厚みは三分の二ほどしかない。これから、どのような姿にしようとしていたのか。脚や幕板のデザインや塗装によつて、印象は大きく変わるはずだ。

——おやじとしては仕事をしのこしてしまつて残念だらうな。

そう思いながら、六畳間との仕切りの板戸を開けた。

兩戸を立ててあるので、板敷きからの明かりで見えるかぎりだが、掃除は行きとどいてるようだ。四畳半とのあいだの襖や、押入れの襖も前のとおりだった。土壁は少し変色していたが、もとの白さはとどめている。

壁際に、父親のつくった家具が置いてある。前にも見たとおり、センノキの飾り書棚、サクラの文机、クルミ材の小ぶりな筆箱が、ひっそりとならんでいる。

葬儀のときも一周忌にも、つぶさに見ようとはしなかった。子どものときから見慣れていたこともあるが、当時は父親の家具に魅力を感じるところがなかったのだ。

——なにしろ、おやじの仕事ぶりを敬遠して逃げだしたぐらいだからな。

井上木工所のカントリー・ファニチャーは、もともと父親のつくる家具を否定するところからはじめた。新しい時代の暮らしに適した家具をつくらなければ、木工に従事する意味がないと信じていたのだ。そして、その成果はたしかにあった。

「ねえ、リーリ。このなかに、なにが入つてるの？」

真也が小筆箆を指さしている。興味津々のまなざしだった。

そこにあつたものは、葬儀の前に確認してある。上のほうに二つならんだ小さな引出しには、父親の遺した預金通帳、いくらかの現金、亡母の遺品の入った小箱。その下に三段ある大きな引出しには、注文を受けたときの書類、製作した家具の設計図、新作のアイデアやデザインを描きためた何冊かの分厚い図録といったものが詰め込まれていた。

預金通帳などの貴重品は、まとめて自宅へ持ち帰ったが、そのほかは引出しに入れたままにしておいた。三回忌のとき、奥さんが持参した虫よけの薬品を入れたそうだ。

「どんなものなのか、よく、見てみたいな」

「ああ、いいとも。……じつはリーリも、それを見たくてきたんだよ」

これから先、この家を保持するのは経済的にもむずかしい。いずれ取り壊すにしても、父親の愛用していた家具と遺品だけは、手放すわけにもいくまい。これらをどうしたらいいか、ここにきてみて、よく考えるつもりだった。

——それだけではないんだ。いまごろになつて遅いけれど。

ゆつくりと白髪頭を横に振つてから、井上さんは胸のなかで呼びかけた。

——じつはね、おやじさん。あなたの仕事を見直したくなつたんだよ。

とたんに若いころのことが思いだされて、年がいてもなく顔の赤らむのおぼえた。

部屋のどこかに、父親が例の渋い顔で座っているような気がした。もしかしたら、なんだいまさ、と苦笑いを浮かべているのかもしれない。

「ねえ、リーリ、開けてみてよ」

真也の催促で、井上さんは氣を取り直した。

三段すべてを引き抜いて、畳の上にならべた。かすかにナフタリンの臭いがした。もうとつくに効能は切れているはずだが、紙の繊維に染みついているのかもしれない。

戸外で風が吹きすさんでいる。木々の叫びが聞こえ、つづいて家全体が揺れた。

「これが設計図だ。ひもで綴じてあるから、破かないように見るんだよ」

「うん、だいに見るよ。……あの座卓のはあるかなあ」

真也が二つ折りになった図面を、板敷きの近くへ持つていった。明るい畳の上にひろげると、新聞紙ぐらいの大きさだった。一枚ずつ慎重にめくっては、見入っている。

——ずいぶん熱心だな。よっぽど横浜で見た座卓が氣に入ったのか。

井上さんは微笑みながら座り、すべての図録を引出しから取りだした。

図録といつても、ちゃんと製本されたものではない。もともとは、父親が思いついたアイデアやデザインを、ありあわせの紙にメモしたり描いたりしたもので、それらを当初はバインダーにはさんでいたが、のちに木綿のひもで綴りあわせた。その後も、描いた紙がたまるたびに、同じように綴りあわせたので、しだいに分厚い図録が増えていった。

そのときどきの思いつきが記録してあるので、父親の生の息づかいが感じられる。

井上さんは弟子として学んでいたころ、なんどかこの図録を覗いたものだ。許されて見たわけではなく、父親の留守をねらって、こっそり盗み見たのだった。

——あのころは、おやじさんの技を早くおぼえたくて仕方がなかったんでね。

いまは懐かしい図録だが、父親と訣別したころは、ひらいてみる気にもならなかった。そこに記されているすべてが、時代遅れの古ぼけた発想としか思えなかったからだ。

——若気の至りっていうもんかねえ、おやじさん。

それを六十半ばもすぎて、ようやく気づくとは遅ればせもいいところだ。

厚紙の表紙に記された番号の順に図録をならべると、全部で六冊あった。そのなかから、もつとも新しい番号の一冊を取りあげて、左のてのひらにのせた。

——これは、わたしがおやじさんのもとから出ていったあとの分か。

あのあと、どのようなアイデアやデザインが生みだされたのだろうか。そのなかで実際につくられたものは、どのぐらいあったのか。未完成のままになった座卓のデザインも、これに描かれているかもしれない。

いろいろと考えながら、おもむろに表紙をひらいた。

最初のページにあったのは、一通の封書だった。茶封筒に毛筆の表書きがしてあった。意外なものが出てきたので、井上さんは当惑した。

封筒に大きく記されているのは、井上理二殿という五文字だった。あきらかに父親の字だ。まさか自分あての封書が、そこにあるとは思ってもみなかった。

「……なんだろう、これは」

図録を膝の上に置こうとして、自分の手が細かく震えているのに気づいた。

とまどいながらも、糊付けされた封筒の先端を破りとった。なかには四つに折った半紙が入っている。震える指で取りだすと、毛筆で記された文面があらわれた。

理一殿

いつになるのかわかりませんが、あなたが図録をひらいてみる気になるときが、きつとくるにちがいない、と期待して待つことにします。そして、ぜひとも、この手紙を読んでくれることを祈っています。

あなたが父のもとから去っていったとき、いずれは戻ってきて父の仕事を継いでくれるだろうと考えていましたが、それは間違いだつたようです。

あなたは自分の力で木工所を築き上げ、独自の製品をつくり、大いに発展してきました。それを知って、父は嬉しく誇らしく思いました。

けっして嘘ではありません。どこの世界に、我が子の成功を喜ばない親がいるでしょうか。同時に、あなたはもう父のもとへ戻ってこないのだということも知らされました。つらくても諦めるほがありません。

父とは別の道へ向かっていく息子を、遠くから見守っていくのが正しいことだと、自分に言いかけました。

しかし、父は望みを捨てたわけではありません。あなたの仕事も立派ですが、父も自分の仕事に誇りを持っています。それを、あなたが認めてくれるときが、かな

らずくると信じているからです。

もしも、父の願いが通じたなら、いつでもいいから父の仕事を受け継いでもらいたい。それだけを伝えたくて、この手紙を書くことにしました。

どうか生のあるかぎり、この仕事をつづけてほしい。

生涯を通じて誇ることのできる、いい仕事をしてもらいたい。

父より

手紙を読み終えたあと、井上さんはしばらく顔をあげることができなかった。

息もつげないほど打ちのめされた気分だった。

薄暗い部屋のどこから、父親に見つめられているような気がした。あるいは真正面に座って、息子の老いた顔を覗き込んでいるのかもしれない。

「おやじさんや、お見通しだったんだねえ」

氣力をふりしぼって語りかけながら、目尻にたまった涙を指先で拭いた。

「こんなに長いあいだ、わたしを待ってくれてたなんて」

これまで一度も、図録をひらいてみようとしなかったのが、いまさらながら悔やまれた。しかし、仮にその機会があったとしても、いまほど父親の思いが胸にしみることはなかっただろう。きっとそうにちがいない、と井上さんは思った。

ようやく目をあげると、設計図を前にした真也がこちらを見ていた。井上さんの独り言を聞きつけたらしく、問いかけるような目をしている。

「驚いたことに、ひいお祖父さんからの手紙を発見したんだよ」

言いながら、井上さんは手紙をひらひらさせた。

すると、真也も設計図の一枚をかけてみせた。

「ほくも発見しちゃった。……これって、そこにある座卓の図面じゃない?」

「ほんとかい、どれどれ」

井上さんは、また目尻を拭いながら、真也のほうへ膝をすべらせていった。

いつのまにか戸外の風が弱まったらしく、さつきまでの激しい音は聞こえなくなっている。それに気づかないようすで、しばらくのあいだ二人は設計図に見入っていた。

やがて井上さんは勢いをつけて立ち上がり、六畳間の押入れへ近づいていった。襖を開けると、上の段に大きな木箱が置いてあった。両手で抱くようにして取りだし、そのまま腰を低くしながら板敷きへと運びはじめた。

真也が駆け寄ってきて手をのばし、木箱の端っこを支えた。

「重たいね、なにが入ってるの?」

「ひいお祖父さんの木工道具さ。……使う前に研がなきゃならないんでね」

井上さんは道具箱を床に置いてから、つくりかけの座卓へ目を向けた。

とりあえずは父親のやり残した仕事を、なんとか完成させたいと思っていた。